

3

股野玉川と南木龍江

西巻 明彦

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部／日本歯科大学医の博物館

股野玉川（1730～1806）と南木龍江（1757～1819）は、龍野藩の藩儒と藩医であり、すでに竹下喜久男氏により先行研究が存在する。股野玉川は藩儒のかたわら私塾である幽蘭堂を経営し、龍野藩の藩士や庶民の基礎教育にあたった。股野玉川は『幽蘭堂年譜』を延享三年九月から文化三年六月二十九日までの日記が残されている（龍野市立図書館蔵）。南木龍江は幽蘭堂の塾生と考えられ、その基礎教育は股野玉川が担ったと思われる。『幽蘭堂年譜』には南木龍江についての記述は寛政三年六月二日から文化十年十月二十六日まで主要部分は22カ所にものぼる。

股野玉川はその交遊録の中で特筆すべきは高山彦九郎との交遊である。もちろん他にも頼春水、細井平洲、尾藤二洲、服部栗斎、樺島石梁、岡田周五郎らが挙げられ、当時の交遊ネットワークは股野玉川に多様な影響を与えたと想像することができる。なかでも高山彦九郎との関係は『高山彦九郎日記』、『幽蘭堂年譜』の両者に認められる。さらに高山彦九郎死後、寛政六年六月二十八日に高山彦九郎一周忌に八名の参加者があり、その中に南木龍江の名も認められる。この後三回忌も行われている。高山彦九郎は寛政の三奇人と言われているが、他の林子平、蒲生君平と共通しているのは海防であり、ロシア南下策に対する対応であった。三者ともそれぞれに接点がある。高山彦九郎との交遊の中で前野良沢との接触が注目点として挙げられる。これらは股野玉川との交遊で蘭学に対し玉川へ大きな影響を与えたと考えることができる。このためか幽蘭堂の関係者から和田謙堂（龍野藩藩医）、関尚庵が長崎へ遊学している。さらに和田謙堂は痘科医であり、オランダ外科出身の池田瑞仙の高弟であり、そのためか龍野藩からも寛政五年円尾玄東、松尾玄長、関尚庵、和田春堂が池田塾へ入門している。その中で関尚庵は京へ入門の後、長崎へ遊学したと思われ、享和元年三月二十四日に龍野へ帰着し、玉川は長崎の様子を聞くために関尚庵を訪問している。このことから股野玉川は蘭学に対し一定の理解があったのではないかと考えることができる。

南木龍江の祖父南木中行（1696～1760）は、後藤良山の弟子である。孫の龍江はそのことから考えるならば出発点は古方派の医師かと思われるが、龍江自体どこで若年時修業したかは必ずしも判明していないが、寛政6年8月18日36歳の時に皆川淇園の塾へ入門しており、『升堂門生録』（池田塾入門帖）にも南木左重の名前が記録されている。さらに南木龍江は40歳を越えた寛政11年11月18日に大槻玄沢へ入門している。この時は南木龍江は寛政11年12月12日に龍野に戻っていることが『幽蘭堂年譜』に記載されており、このことは入門はしたものの直接大槻玄沢から指導を受けることは少なかったものと推測される。南木龍江は刊本として『医法新話』が残されているが、その中に吉益東洞に対し、「其教抛り易キトイヘドモ、実ハ疎漏ナリ」と批判していることが特徴的である。南木龍江は30代後半に淇園塾、池田塾へ入門し、40代で芝蘭堂へ入門していることは、龍江そのものが常に新しい医学を追い求めており、このことに龍野玉川は大きな影響を与えていると推察される。

股野玉川と南木龍江の活躍した時期は18世紀後半であり、天明の大飢饉を始めとして大災害の真ん中であつた。緒方春朔が人痘種痘を開発したのも18世紀末であり、池田瑞仙が痘科を創設したのも18世紀末、橋本伯寿が『断毒論』を出版したのも19世紀初めで、その時代を同じくする。ここには中国文化の受容と蘭学の受容の複雑な関係が認められる。本来漢学者である股野玉川が蘭学に関心を示し、南木龍江に影響を与えたならば、近世儒学の普及の延長線上に蘭学の受容があると考えられる一つの事例であると思われる。